

福島原発事故後 6 年間でモモのセシウム含量はどう変わったか？ -避難地域における果樹営農再開に際しての基礎データとして-

福島大学農学系教育研究組織設置準備室
准教授 高田大輔

チェルノブイリ事故を受けた報告では、事故後 3 年程度の間は果樹の果実中放射性 Cs 濃度は毎年 3 分の 1 ずつ低下するとされていた。福島原発事故でも同じような変化を示すのではないかと考えられており、その推測通り、福島県における事故後 3 年間のモモ成熟果実の放射性 Cs 濃度は、事故年で最も高く、年数の経過に伴って、大きく低下したことを以前の報告会にて発表した。果実では 1 年あたりの放射性 Cs 濃度の低下が著しいこと、加えて福島県内のモモ生産地域はフォールアウト量の比較的少ない地域に集中していることもあり、福島県におけるモモの出荷は事故後 2 年目以降、ほとんど問題がない状態となった。実際の測定濃度が低いことは、福島県のモモ生産にとって喜ばしい事であるが、福島第一原発付近の避難地域にも、ニホンナシなどの果樹産地が点在している。これらの地域の現状を明らかとすることが重要であるが、事故経過後 3 年目以降の果樹の放射性 Cs 濃度の変化は、チェルノブイリ事故では明らかとされていない。これらのような測定自体はある程度行われてするものの、検出限界以下とされる報告が多く、実際の濃度変化を追った報告に関してほとんど存在しない。また、福島県内においても、主な果樹生産地帯では、モニタリング調査や自主検査が行われているが、基本的には検出限界値以下であり、より学術的な具体的な数値を調査した例は少ない。原発事故以降 6 年（6 作期）が経過し、果樹における放射性 Cs に関する問題はかなり落ち着いてきた。次に検討すべきは、避難地域などでの果樹栽培をどうするか？である。これらの地域の果樹栽培再開に際しての参考データとして、これまでの 6 年間の調査についてまとめたモモに関する放射性 Cs 濃度などについて報告する。具体的にはモモ果実の経年的な濃度低下の様子について解説し、時間があれば、その原因である、樹体内の放射性 Cs 含量の推移について紹介し、議論を行いたい。